



犬伏和之, 白鳥 豊 編
 「改訂 土壌学概論」
 出版社：朝倉書店, 2020年

本書は、昭和26年に刊行された「土壌通論」（青峰重範 著、朝倉農業選書）に起源を發する。昭和52年に改訂（高井康雄・三好 洋 著）された同書の目次を見ると、「1. 土壌とは何か」から始まり、土壌の物理性、化学性、生物性について詳述し、土壌の生成分類、農業利用、そして環境汚染、土壌保全へと展開していく。そのはしがきに記されているように、農学系大学、短期大学、農業大学校における土壌学の導入、あるいは農業改良普及員や農協指導者、自治体農業担当者などの実践的テキストとして幅広く利用され、平成13年には「土壌学概論」（犬伏和之・安西徹郎 編）として書名が変更された。章構成を細かく見てみると、当時の改訂により環境土壌学的な視点が導入されるとともに、土壌診断や土づくりに関する項目が増大したことがわかる。また、時代の要請を反映する部分でもある後半2章（「22. 環境汚染と土壌管理」および「23. 土壌保全と人類」）は、「土壌通論」の章タイトルは引き継いでいるものの、地域的あるいは全球的な環境問題に対する危機感を訴えかける内容には大きく変更されていた。昭和52年当時には普及していなかった“地球温暖化”という言葉も、この時に項目として加えられた。

さて、「改訂 土壌学概論」の前身となる「土壌学概論」から19年後の今回の改訂では、章構成が大きく変更された。土壌の物理性、化学性、生物性については、項目を整理してそれぞれ章としてまとめられ、体系的な理解がし易くなったと感じる。水田、畑、施設、草地、樹園地、森林と土地利用形態で分けられていた土壌特性の解説は「9. 我が国の土壌」としてまとめられ、日本における土壌の分布と農業生産との関係を包括的に理解する工夫がなされている。また、土壌微生物研究のトレンドの変化を感じることもできる。例えば、「6. 2 土壌微生物」で述べられる植物共生微生物について、前は窒素固定菌および菌根菌が紹介されていたが、今回は“エンドファイト”および“植物生育促進根圏微生物”（PGPR, PGPF）が項目として加えられている。その他、土壌科学分野の進歩が随所に反映されており、2010年代に概念が発達した“都市土壌”についても、「9. 5 里山と都市の土壌」の中で最新の動向を踏まえた解説がなされている。

最終章にあたる部分も、「10. 環境と土壌」として大幅に改訂されている。東日本大震災にともなう福島第一原子力発電所の事故を受けて、放射能関連の記載が新たに導入された。また、土壌学界で高まる土壌学の歴史や土壌教育の役割に対する期待に応え、哲学から学習指導要領での取り扱いまで、俯瞰的に土壌を理解することができる。

なお、本会会員の皆さまには今さら説明の必要はないが、編者の一人であるの犬伏和之先生（千葉大学大学院園芸学研究科）は、平成19年から2年間、本会会長を務められていた。また、現在の本会会員としては、東京大学大学院農学生命科学研究科の妹尾啓史先生（「6. 土壌の生物性」を執筆）、山形大学農学部程 為国先生（「10. 5 土壌学の歴史」を執筆）が著者として参画されている。その他の著者を拝見しても、気鋭の若手からベテラン研究者まで揃っており、初学者や一般の方のみならず、研究者であっても一読する価値のある一書である。

坂上伸生（茨城大学農学部）